



成長期の手足の痛み —成長痛—

子供の成長期に四肢の痛みを生じる場合によく「成長痛」と言われることがあります。「成長痛」には大きく分けて二つの病態があります。

幼児期の「成長痛」

2～7歳の子どもに見られます。夕方から夜に急に足が痛いと言いきします。ところが翌朝になるとケロッとして元気に走り回り、前夜に痛がったことを忘れていたこともあります。痛みを訴えたか所にも、腫れや変形は見られません。

しかし、また夜になると痛いと言いきします。このような場合は、ほとんどが関節や骨には異常がありません。下の子供ができたり、母親が勤め始めたりしたことが誘因となることが多く、子供の、親に甘えたいという情動が原因と一般に考えられています。痛いという場所を優しくさすってあげると治まっていきます。

痛みを翌朝も持続して訴えたり、歩き方がおかしいような場合は関節や骨の病気の可能性もありますので、専門医に相談して下さい。

学童期以降の「成長痛」—骨端症—

この時期には骨の病気が多く、注意が必要です。成長期には骨が長く伸びるために骨の両端に成長軟骨と骨端と言われる構造があります。また、成長速度は骨が一番速く、筋肉や腱は少し遅れて伸びていきます。骨端や成長軟骨の血行が悪くなったり、腱などで慢性的に引っ張られて骨端や成長軟骨に障害を生じると骨端症という病気になります。

骨端症の起こる場所

骨端症はそれぞれ起こる場所があります。

○ペルテス病

大腿骨頭（足の付け根、股関節）の骨端の血行障

害で、小学校低学年の男児に多く見られます（女児にもまれに見られます）。大腿から膝にかけて痛みを生じます。骨の変形を生じるため、一番注意しないといけない骨端症です。

○オスグット病

小学校高学年から中学にかけてスポーツをしている子によく起こります。脛骨粗面（膝の皿の骨の直ぐ下の骨が出っ張っている所）の骨端が腱に繰り返し引っ張られて起こります。成長が終われば治りますが、剥がれた骨を摘出する場合があります。同じように膝の皿の骨が引っ張られて起こるラッセン病という骨端症もあります。

○上肢の骨端症

少年野球をしている子供では、上腕骨小頭（肘ひじの外側）に骨端症が起こることがあります（パンナー病）。

○足部の骨端症

10代の女兒に多い第2中足骨の先端（第2指の付け根）に起こるフライバーグ病は、中足骨が変形して成長後も痛みを生じることがあります。

骨端症はその他の骨にもあり、以後の骨の成長に影響を及ぼす病気もあり早期に治療が必要です。成長期の子供が持続して四肢の痛みを訴えるようなら、早めに専門医を受診して下さい。

【広報おかや 10月号】

